菅茶山顕彰会会報

第30号
発行
菅茶山顕彰会
2020年3月1日

廉塾東池発掘現場

新時代　元号「令和」に想う

菅茶山顕彰会会長　鵜野　謙二

西暦は時空の流れを刻む世界共通の年号ですが、元号は日本の古代から続く伝統的な歴史・文化であります。天皇即位の一連の儀式・関連行事をテレビで改めて再認識いたしました。

安倍総理は記者会見で新元号の「令和」について次のような内容で述べています。『悠久の歴史』と薫り高き文化、四季折々の美しい自然。日本の国柄をしっかりと次の時代へ引き継いで行く。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。人々が美しく心を寄せ合う中で文化が産まれ育つ、という意味がこめられている。

新元号「令和」の典拠は、日本に現存する最古の歌集である「万葉集」であり、日本の古典である国書に由来するものは初めてのようです。「万葉集」巻五の「梅花の歌三十二首」の序文に由来するとされています。

『時に初春の令月（れいげつ）にして、気淑（よ）く風和（やわら）ぎ、梅は鏡前の粉（こ）を披（ひら）き、蘭は珮後（はいご）の香を馨（かおら）す』歌人、大伴旅人の邸宅で催された宴席で詠まれた「梅花の宴」の一場面のようです。

「梅花」は茶山の漢詩にもあり、菅茶山の家紋でもあります。「令月」は菅茶山の生誕月（二月二日）です。２０１９年の世相漢字一字は『令』です。新元号『令和』は正に菅茶山の人生（人間の生き方・人間性）に重なって見えます。

菅茶山の遺芳・遺徳は教育の文化遺産であり、我が郷土福山・神辺の誇り得る財産（宝）です。令和元年、新時代の限りなき発展・流れとともに、関係機関・他団体と連携しながら、菅茶山顕彰会の活動も新たなる原点として、後世に伝えていきたい・残しておきたい茶山・廉塾文化を楽しく実感できるような参加型・体験型の顕彰活動を「ワンチーム」で創造し、共有していきたいと思います。

廉塾ならびに菅茶山旧宅修復保存計画
一年遅れの令和二年2020年スタート

3月27日、国特別史跡「廉塾ならびに菅茶山旧宅」修復保存活用策定委員会（鎌田輝男委員長）が開かれ、その計画の概要が公表された。それによると、当初予定の2019年度修復工事着工に先だち、発掘調査が行われるため、着工は一年遅れ、2031年度完工予定。

6月3日、発掘調査スタート

福山市文化振興課（担当　平林工氏）発掘調査が始まった。この間、修復保存活用策定計画書作成のため、三、四年かかった。対象となるのは①養魚池の導水管・畑の花粉分析②元南寮（中門前）③東池（講堂東庭）④元薬園（現南寮）・花粉分析⑤側溝（祠堂前）。2020年度、祠堂復旧事業から開始、2031年度、全事業を完了予定。

6月25日、第一回報告会　於　廉塾

報道関係者を含む約50名が正門付近の「特別史跡　廉塾ならびに菅茶山旧宅」石碑の樹陰で、平林氏の報告に聞き入った。

・廉塾　弘道館（水戸市）、閑谷学校（備前市）と並ぶ国特別史跡（全国62カ所）で、敷地3000㎡。塾の景観がよく保存されている。残された文書から、寛政4年、漢詩人、教育者、儒学者、菅茶山によって、立身出世ではなく、学問の趣旨を体得する次世代を育てる目的で創設。明治5年、後継者晋賢まで存続、小学校令によって廃塾、その歴史を閉じた。

西隣に台所（槐寮）。南寮は元々は現在地より、北側、水路寄りにあったと思われるが、幕末、明治の火災で焼失、そこから礎石、焼土、焼瓦などが発掘された。織部焼陶器の破片も出土した。この寮舎から西下、萬念寺にかけ、砂地が続いている。物資運搬の拠点として、高屋川の流路変更がなされた痕跡と考えられる。

今回の目玉は、廉塾講堂東庭にあった「東池」の存在確認である。東西11㍍、南北7㍍。池の側面は厚さ20㌢の粘土で補強されている。現存の養魚池への移転理由は、川の中にあったため、洪水で埋もれたためと思われる。7月以降、土壌調査で、種子を調べる。

現場で、鵜野会長が「東遊漫録」（頼山陽のスケッチ）、「茶山詩」（荷（蓮）沼と螢を詠込む）、「茶山日記」（養魚池への魚の移動）など、関連事項について補足説明した。

なお、紀要「広島文化財ニュース」（第209号）「廉塾の池と寮について」（菅波哲郎　広島県文化財協会　平成23年）。当会会報バックナンバー「第21号」2011年「中国新聞所載記事」&第24号」2014年発の「廉塾の東池～詩に詠じられた荷沼～」（菅波哲郎）に詳しい。

7月13日　報告会要旨　報告　鵜野会長

①東池　存在が裏づけられたが、永久保存については、水の管理が難しいことから問題がある。

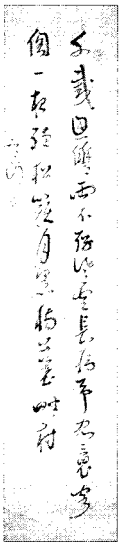
②南寮　中門から入って直ぐの東側にあったと思われる。

③養魚池　水の出入りが未解明。取水・排水口の存在が定かでない。

8月28日　「宿生田」詩碑建立について

鵜野会長以下三役が福山市経済観光局文化観光振興部文化振興課畑信次文化財担当課長を訪ね、廉塾活用計画の一案として、当会永年の願い、廉塾に茶山自筆の「宿生田」詩碑建立についての趣意書を届け、検討方を要望した。

千歳恩讐兩不存…



「宿生田」茶山自墨書

高橋孝一顧問によれば、「今から20年ほど前、この「宿生田」茶山自墨書（大坂城博物館所蔵）の存在を知った。早速、行政窓口にこの詩碑の廉塾建立を申し入れたが、コンプライアンス上叶わず、今日に至っている。時恰も平成から令和へ、廉塾修復を機に、令を和げ、町内外詩碑群の集大成、画竜点睛の一基としてこの詩碑を建立、全国詩吟朗詠会を定例化、幾久しく次世代に茶翁を語り続けたい。それが私たち顕彰会の願求である。関係各位のフレキシブルなご理解とご支援を希んでやまない。」と

菅茶山と乗如上人

黒瀬　道隆

はじめに

菅茶山は近くの寺院を訪ねて、学僧と交流したり、詩会を開いている。黄葉夕陽村舎詩の中にその学僧の名前が見られる。大空上人（遍照寺）、嶺松上人（光蓮寺）、如実上人（国分寺）、乗如上人（寶泉寺）、祐教上人（明正寺）などである。他にも龍泉寺、西福寺、東福院、寒水寺などにも足繁く通っている。

この中で長期にわたり交流したのが乗如上人ではなかろうか。寶泉寺発刊の寺伝書「亀居山観音院寶泉寺」等を参考にして、乗如上人とはどのような人物であったのか、菅茶山との交流を明らかにしたい。

高野山準別格本山亀居山観音院寶泉寺

寺伝書にある「高野山寶門主乗如前官壽像」を見て驚くのは、真言宗檀家の仏壇にある「弘法大師像」と同じ法衣と座す姿であり、高野山真言宗の第三五八世座主で、幕末期に高野山真言宗を率いた人物である。茶山と十一歳年少の乗如上人の関係を見てみたい。

一　寶泉寺について（福山市神辺町徳田）

福塩線湯田村駅の北側に隣接して建つ高野山真言宗準別格本山で山号は亀居山である。乗如上人書の「亀居山寶泉寺縁由実記」によると「天長年中（九世紀前半）の創建と伝え、本尊は、観世音菩薩で亀居山と号し観音院と称し寶泉院と名乗る。その後いつの頃か廃寺となる。正安～観応年間（十四世紀前半）の頃、宥鍈（ゆうかん）上人が廃寺を再建し住職となったが、再び荒れる。元禄年中（一六九〇年代）に宥辨（ゆうべん）上人が再建に尽くし、中興の祖とされている。しかし、元禄十三年（一七〇〇）の火災でことごとく灰燼に帰してしまった。四世宥栄上人が復興に努めた。その後、宥深上人、龍印上人、英寂上人、観如上人と続き、十二世が乗如上人である。寶泉寺は境内地が低く、度々洪水に見舞われていたが、九世観如（かんにょ）上人の時、徳永徳右衛門の助けで盛り土、本堂を改築し、十二世乗如（じょうにょ）上人が室内を整えた。高野山正智院より壁画を移し堂壁に貼り、又備中国鴨方の画家田中索我（さくが）に山水人物等を各室の襖や杉戸に描かせた。その華麗さで「雛御殿」とも称せられた。」（抜粋）とある。田中索我や菅茶山などの襖絵や墨書など多くが現存している。

二　乗如上人とは

乗如上人は宝暦九年（一七五九）徳田村（現在福山市神辺町）に生まれる。父高木新九郎、母は徳永氏。天保六年（一八三五）高野山で入寂する。実名は乗如、假名は惠（慧）充、号は丹崖と称した。明和八年（一七七一）、十三歳の時、寶泉寺観如上人に従い剃髪する。

三　茶山との出会いと交流

菅茶山との出会いについては、「剃髪後、旁ら隣村川北村菅茶山に従いて経史詩書を学ぶ」と福田祿太郎が「丹崖乗如和尚畧傳」（備後史談巻一）で述べている。しかし、茶山は明和九年（一七七二）から安永二年（一七七三）に京都に遊学中で、私塾「金栗園」は安永四年（一七七五）の開塾であるから、入塾はその時まで待たなければならない。入塾したのであれば開塾してからであろう。この年、藤井料助（暮庵、当時九歳）も入塾しており共に机を並べていたのかも知れない。

安永七年（一七七八）茶山31歳、乗如20歳「遍照寺の賞月の筵、期を失する者数人、一挙して以て前責を償わんと擬し、九月九日霊昌恵充の二沙門、桑田元厚及び余、同じく国分寺の後山に登高」（遊研岩記）とあり、この時期から茶山や霊昌上人（光蓮寺住職）などとも交流していたことが窺われ、乗如上人は将来の学僧として茶山や近隣の上人からも認められていたのである。

さらには、この年、乗如上人は高野山に登り、前の寶性院門主兼正智院住職覚道法印の顕密の教えを学び、その愛顧を受けるようになって、学僧としてその才を認められるようになったのであろう。

高野山寶門主乗如前官壽像

天明四年（一七八四）茶山37歳　乗如26歳

重陽の節句（九月九日）、大空上人（遍照寺）恵充（乗如）上人と共に近くの山に登り、菊酒を味わいながら重陽の節句を祝った詩がある。遍照寺も寶泉寺も真言宗の寺院で、上人同士も交流があった。この頃、乗如上人は高野山に起居している時期で、偶々、寶泉寺に帰っていたのであろう。

「登高同空・充二上人賦」

黄葉夕陽村舎詩　前編　巻二

大野秋容入酒觴　大野秋容　酒觴に入る
登高携客正斜陽　登高　客を携い　まさに斜陽
賞心且作須臾樂　心を賞して　且須臾楽を作す
世態難逃日夜忙　世態　日夜の忙より逃がれ難し
遠水忽明踈雨外　遠水　忽ち明るし　踈雨の外
孤巒迴出暫雲傍　孤巒　迴か出ず　暫雲の傍ら
人生幾得好重九　人生　幾ときか　好重九を得ん
紫菊丹萸依舊香　紫菊　丹萸　旧に依って香し

（語註）酒觴＝酒杯。須臾＝暫くの間。世態＝世相。踈雨＝あらい雨。巒＝小さくとがった山。暫＝わずかの間。重九＝重陽の節句（九月九日）。萸＝かわはじかみ、ぐみ。

【ちょっと休憩】重九　重陽の節句

陰暦九月九日、菊の節句。陰陽思想で奇数を表す陽に九が重なる日であることからいう。この日には「登高」といって、近くの小高い丘や山に登り、茱萸の実を頭に挿して邪鬼を祓い多幸を祈る風習があった。中国唐代の詩仏と呼ばれた王維の詩にも重陽の節句を詠んだ詩がある。

九月九日憶山東兄弟　王維

独在異郷為異客　独り異郷に在りて異客と為り
毎逢佳節倍思親　佳節に遭う毎に倍親を思う
遥知兄弟登高処　遥かに知る兄弟高きに登る処
徧插茱萸少一人　徧く朱萸を挿して一人を少くを

寛政五年（一七九三）乗如35歳

観如上人の没後、寛應上人（十世）、玉如上人（十一世）と続き、寶泉寺の十二世住職となる。しかし、度々高野山を往来し席の温まることがなかった。住職が不在の時は、同宗の他の寺院の住職が兼帯していた。寶泉寺は、西福寺（神辺町川北）の上人が兼帯していた。

寛政八年（一七九六）茶山49歳

「黄葉夕陽村舎」が福山藩郷校となり、「廉塾」「神辺学問所」と称した。

寛政十一年（一七九九）乗如41歳

聖善院住職となる。法印となり前門主となる。後、正智院に転住し、衆議席に昇進する

寛政十二年（一八〇〇）茶山53歳　乗如42歳

茶山は福山藩儒となっており、藩の重役や文人とも交流がある。その関係で乗如上人も藩の重役とも交流が生まれたものと思われる。

二月、東門太夫と称した藩重役内藤景充宅で乗如上人の送別式が行われた。その詩宴に山室箕山・中山光繁（福山藩御側用人）佐原義方（福山藩家老）なども参加している。茶山は次の詩を詠んでいる。

「送惠充上人之高野山　録舊作」

惠充上人の高野山に之くを送る旧作を録す

黄葉夕陽村舎詩　後編巻八

夙願君業進　夙に願う　君が業の進まんを
今恨君學成　今恨む　君の学成るを
學成何所恨　学成るは何の恨む所ぞ
遠近人爭迎　遠近　人争い迎えて
妙選竟難辭　妙選　竟に辞し難し
抛此白社盟　此の白社の盟を抛て
迢遞鼎臺遠　迢遞たり　鼎台遠く
蒼茫薇海横　蒼茫たり　薇海横たわる
別離老愈難　別離　老いて愈難し
此行轉愴情　此の行　転情けを愴ましむ

（語註）妙選＝念入りに選ぶ。白社＝清い仲間。迢遞＝遠くへだてること、遠いさま。鼎臺

＝高野山。蒼茫＝見渡す限り青々として広いさま。薇海＝瀬戸内海。

また、内藤景充から送られた詩が、寶泉寺に蔵されている。日付が庚申二月（一八〇〇）とあり、この時の作であることが判る。

送君堪見曙天鴉　雨後江頭宜泛槎
彩筆詩成投緑水　錦帆宴止人青霞
路訪知己皆歓語　行対僧儔尽拝嘉
五式画堂訝仏境　何思郷國三春花

右送

恵充上人之蓮峰

庚申二月　藤景充再拝

更に、乗如上人の内藤景充（東門大夫）、佐原義方宛の墨書が寶泉寺に蔵されている。佐原義方は、邸宅が福山城の西側にあったことから西門大夫を呼ばれた人物である。送別の宴の返書を贈ったのではないか。

春来相約轉相差　恨是采芳忙裏過
昨日迎歓有何事　只看戯蝶検残花

右奉謝　佐原　内藤　二大夫　枉山房得韻麻

（以下、続きはHP「菅茶山新報」に掲載）

（本会常務理事）

『東遊漫録』を携えて神辺界隈へ

塚本　照美

頼山陽の『東遊漫録』を読む機会があった。安芸国を出発した頼山陽が目にした景色や詠んだ漢詩に興味を持ち、昨年の夏、竹原、神辺・尾道へと足を運んだ。

一、『東遊漫録』とは

『東遊漫録』は十八歳の頼山陽が叔父の頼杏坪に連れられて、初めて江戸までの旅をしたときの日記だ。

この書物について富士川英郎氏は『東遊漫録』（宮島誠一郎筆写　東城書店　一九八二年）の「解説に代えて」で次のように述べている。

寛政九年（一七九七）三月十二日。十八歳の頼山陽は叔父の頼杏坪に連れられて、郷里の安藝国広島を立って江戸に向かった。頼杏坪は藝藩の世子浅野斉賢の侍読として江戸勤務となったため、山陽は幕府の学問所であった昌平黌に入学するためであった。（中略）単に昌平黌に入学させるためというばかりでなく、山陽が父母の膝下を離れ、異郷にあって規則正しい生活をしながら勉学に専念することによって、鬱病を克服することを、その主な目的としたものであったと思われる。とある。

実際、山陽は寛政五年に十五歳になったころから躁鬱病の症状を表し、この頃は発作に襲われていたらしいことが、母梅颸の日記に書き付けてあった。

山陽は須磨古関、逢坂古関・膳所城も過ぎ、美濃大垣の辺りから東海道に入り、江尻・府中を過ぎ、箱根山を越え、川崎、品川に至りて、四月十一日に江戸に着いた。

その後一年間、この大都に滞在して、昌平黌に入り、尾藤二洲（叔父）や服部栗斎の教えを受けたが、この間の生活の詳細は分かっていない。おそらく所期の目的を十分果たせなかったのではないかという説があるが、翌寛政十年四月四日、再び叔父杏坪に従って江戸を立ち、五月十三日に安藝国の父の家に帰ったのである。

二、『東遊漫録』にみる「神辺」「尾道」の記載

三月十二日、叔父杏坪と安芸の国広島を立った山陽は、十二日に竹原に到着し、十三、十四日と竹原に滞在する。十五日に竹原から舟に乗り、忠海に赴き、忠海で上陸し、陸路尾道へ。そして尾道に宿をとる。

『東遊漫録』の中で、山陽は尾道界隈を次のように記している。

十六日　尾道は繁華の処なり。地、海浜にして、向に呼べば応ふ可きほどの長き島あり。連り亘る事三四里。其間の海、大きなる川を見るごとし。船の入り来る処せまくして、泊する処ひろし。実に天設の大湊也。此尾道にて吾国（安藝国）の封彊（領地）尽く。

十七日（前略）尾道より舟を発す。千光寺・天寧寺・西国寺等の楼閣。市の後の山腹に高く聳たるも瞻（見）る。

千光寺尤も高し。十丈ばかりの水精石の六角なるが塔の上に突立す。昔唐人夜光を望見て、此石中より玉を取り出すと言ふ。故に尾道、別名玉の浦と言ふ。という二行の割書きがあり、千光寺も絵が描かれた数枚の風景スケッチがある。

さらに同日の欄には

尾道の千光寺を遠く眺め、さらに舟を進め、神辺へと進む。今津より舟を捨、帽子がたほ（未詳）を背指（振り返り見る）して行。此

処地卑く、連日の雨に平田水みなぎり、遥の山際迄渺茫たる中に、黄菜花、麦苗等の浮出たる景奇也。これを遥に隔て、福山城の天守聳えたるを望み、芦田川を渡り、神辺に宿す。山陽に隠れなき菅太中といへる父執（父の友人）の家を問ひて、其別荘黄葉夕陽村舎と言に宴を設けて、終夜実話を聞く。田の中の舎にて、此夜は月さへて景よし。門人に命じて横笛を吹かしむ。雅興いはんかたなし。と、船から眺めた尾道の風景に続き、神辺に着いた様子が記載され、今と変わら黄葉夕陽村舎の挿絵（HP「菅茶山新報」参照）を中央に、上部に　夕陽黄葉村／舎図　この後に／大川あり　下部に　此所に神辺駅あり／本宅は駅中也　の書込みがある。

母に送った『東遊日記』にも

十七日　晴　川尻河漲ル。陸行スルヲ得ズ。故二尾道自リ舟シ、而シテ今津ニイタリ、神辺二至ル。礼卿兄弟（茶山・耻庵）歓迎スとある。

さらに、『東遊漫録』の十八日の欄には

十八日　神辺を発す　家叔（叔父杏坪）の同道の両士　広島より此所迄後を追来りて此駅より程を同して行　先日已に此約をなし置たる也　此日少し陰る　七日市川急流なれは台（臺）にのり渡る　備後備中の界ひの矢掛駅に宿す　とあり、『東遊日記』にも

十八日　朝、長・服二氏ト与合ス。神辺自リ七日市川ヲ渡リ、矢掛二至ル。初メテ逆旅二宿ル　と同じような内容で母に送っている。

菅茶山は、父頼春水や叔父の杏坪と親友であった。茶山と山陽との初対面は、天明八年六月。四十一歳の茶山が広島の父春水の家を訪ね、九歳の山陽にあった時である。山陽とはそれ以来の再会であった。山陽を迎えた菅茶山、さらに耻庵の兄弟。さらに夜は月の宴となった。その中で酌み交わされる酒、弾む会話、遠く近く聞こえるカエルのなき声。そこに、門人の横笛。どんなにか楽しい一夜であったことか。まさに「この夜は月さへて景よし，雅興いはんかたなし」という文言に山陽の気持ちが込められている。

二百二十年たった今、山陽が見たであろう景色、聞いたであろう音等をそのまま感じることのできた神辺・尾道・竹原は楽しい旅となった。（東京都八王子市在住　本会会員）

中3国語授業「日本の漢詩を読む」

近大付広島中福山校　藤田　修司

本校、近畿大学付属広島中学校福山校では、中学3年生より国語は「現代文」と「古典」に分かれ、そのおかげで古典分野については公立中学校よりも多くの教材に触れることができます。そんな中で一学期、単元「漢文入門」として「中国の漢詩（李白・杜甫）」を扱ったのですが、漢文が日本の文化に大きな影響を与えてきたことを実感してもらうために、「日本の漢詩」についても単元後の発展学習として取り上げました。

まずは生徒たちにもなじみがあり、興味を引けると考え、武田信玄や上杉謙信といった戦国武将の詠んだ漢詩を紹介し、そこからその両雄が激突した「川中島の戦い」を題材にした、頼山陽の「不識庵機山を撃つの図に題す」につなげるという展開を取ったのですが、この授業の本当の狙いは、そこから更につなげて、その頼山陽の師匠である菅茶山を紹介するところにありました。（図1）

私学である本校には広く備後一円から（一部は岡山からも）生徒が通学しており、神辺地区出身の生徒たちは別として、「菅茶山」について「知っている」という生徒は残念ながらほとんどいないのが現実です（また中学の教科書や国語便覧にも登場していません）。

ですが、江戸時代の日本を代表する漢詩人である「菅茶山」のことを、まして福山にある学校の生徒たちが習わないままで漢詩の学習を終えるというのは、ひどく勿体ないことだと思います。そうした思いから、この機会をうまく活用して「菅茶山」の人となりや、作品について触れてもらいたいと考えたのです。

先述したように、多くの生徒たちにとって「菅茶山」は初めて知る存在だったのですが、逆の見方をすれば、そんな人物がこの福山の地にいたという事実は生徒たちにとっては新鮮な驚きであったようで、頼山陽とのエピソードなども合わせ、生徒たちも大いに関心を示してくれました。

ですが、そこはやはり中学生なので、紹介まではできても菅茶山の漢詩の良さまでを伝えるのは簡単ではありません。そんな中で大変役立ったのが、「茶山ポエム」や「茶山ポ

エム絵画」で、スライドでポエムと絵画を同時に写しながら鑑賞させることで、生徒たちも詩の描く内容やそこに込められた茶山の優しいまなざしを感じることができたようでした。（図2）

とはいえ、「漢詩の良さ」はそうした内容面にあるだけでなく、それを「どのように表現しているか」が同じぐらい重要な要素となっています。今回の授業はあくまで中学生向けの「導入」ということなので、残念ながらそこまでは触れられませんでしたが、またこの生徒たちが成長し、高校で改めて漢詩について学習する機会が来たときには、例えば代表作である「冬夜読書」などを、原文のままで味わせてみたいと考えています。（図3）PP（図1～3）はHP「菅茶山新報」へ掲載

（近畿大学付属広島中学校福山校教諭）

菅茶山顕彰会入会にあたって

高橋　洋典

私が菅茶山について知っていることと言えば、廉塾、郷土が産んだ偉大な文化人、その遺徳を後世に伝える菅茶山記念館、そして茶山饅頭といった程度しか持ちあわせていない。茶山饅頭の味は私の味覚に殊の外馴染み、それゆえお土産にもよく重宝させていただいている。その他のことについては、文字面だけの知識であり、漢詩に至っては学校で学んだ漢文の教科書のみである。このような私が会員として会のお役に立つことができるのだろうかとの思いを持ちつつ顕彰会に入会させていただくことになりました。

入会して直ぐの四月新年度第一回の理事会、そして町並み格子戸展、新年度総会、茶山墓所の清掃、そして墓参の集い、ポエム市役所ロビー展、ゆかりの地学習会と、行事の準備等に参加させていただきました。

町並み格子戸展では、ご協力いただいた各戸の格子戸に子どもたちが描いたポエム絵画を掛けていき、掛け終った後、そのバランスを見ながら廉塾まで歩いて帰って来る中、往時のままの区割りの旧山陽道の神辺の町並みと、見たことも会ったこともない茶山先生をダブらせて見たりしてみました。また、茶山墓所の存在すら知らなかったことにはただ恥じ入るばかりでした。

こうした行事等に参加させていただく中で今日までほとんど知らなかった顕彰会の活動の一端を知ることができました。遠い存在であった菅茶山がいかほどかは身近に感じられるようになったかなと思っています。

平成の大合併から十年を超え郷土神辺は益々都市化が進み旧町外からの転入者も増大している今日、故里神辺の偉人菅茶山の遺徳を末永く伝えて行くためにも菅茶山顕彰会の果たして行く役割は欠かせないと思っています。「菅茶山の遺徳とは」会員諸先輩のお教えをいただきながら微力ではありますが、会の継続と発展に寄与できればと思っています。

（本会新理事）

菅茶山顕彰会研修に参加して

松岡　明美

「すてきな。誰が飾っているのだろう？」三日市通りから七日市通りの茶山ポエムを見る度にそう思っていました。歴史の重みを感ずる格子戸に掲示されている「ホタル」や「夕日」などの絵画はとても風情があるものでした。

今年から顕彰会の一員に入れていただき、あの町並み格子戸展が顕彰会の活動のひとつであることが分りました。また、十一月には活動のひとつの研修旅行にも参加させていただきました。紅葉の美しい晩秋の一日でした。かもがた町屋公園から補陀落山円通寺、西爽亭、吉備真備公園を解説付で散策しました。「自分が動かなければ本質は見えてこない。」いくら研修で話を聞いても、自分の足で歩かなければ千里の道も進めないとは、このことだなあと思いつつ皆さんと一緒に歩きました。

私が一番心に残ったのは「かもがた町屋公園の郷土の館」でお聞きした拙齋のことでした。拙齋の頌徳碑建立を斡旋したと言われるのは菅茶山でした。茶山の居所神辺と拙齋の居所鴨方とは徒歩で一日の距離だったそうです。まる一日歩いてでも会いに行ったり手紙のやりとりをしたりとかなり親しくしていたことが伺えます。そして、二人は同じような思想を持っていたのではないかと思うのです。朱子学を正学とする「寛政異学の禁」は拙齋が柴野栗山に勧め、栗山が老中松平定信にしたことが一因となっています。朱子学に

ついて言えば、徳川家康の時代に遡ります。家康は儒学の中でも最も主君に対する忠義を重んじる朱子学に注目しました。そして藤原惺窩が体系を整え、その弟子の林羅山が家康に仕え、初代大学頭となりました。朱子学は幕府の公式の学問となり、各藩も藩校を創り朱子学の普及に努めるようになりました。そういう時代の流れの中で拙齋や茶山たちも朱子学を中心とした塾を創ったと思われます。

幕末は勤皇の志士が幕府を倒した時代です。家康が徳川家安泰のため力を入れた朱子学でしたが、朱子学を学んだ人々の多くは倒幕へ走りました。拙齋も茶山も江戸幕府の終りを見ることなく没しますが、世の中が大きく変わろうとしていることに気づいていたのだろうなあと思っています。茶山の生きた時代にタイムスリップして色々と思いを巡らせてみるのも楽しいことでした。（本会新理事）

茶山ポエム絵画展に寄せて

山下　英一

今年も恒例の茶山ポエム絵画展の季節となりました。毎年3000点を上る出品があり、その中から、最優秀賞8点、優秀賞122点、入選など約600点が選ばれました。児童、生徒が一生懸命画いた作品を選んで行く作業は昨年まで審査員十名ばかりで約一日かかりましたが、本年は12月9日、会場を文化会館小ホールに変更、詩題別に全作品を会場一面に並べ石岡洋三審査委員長（神辺美術協会）以下所属会員・関係スタッフなど20名が巡回審査する方式を採択、効率よく僅か三時間で終了することができました。

茶山ポエム絵画は茶山の漢詩を現代詩に翻訳され園児、小中学生、もちろん、大人も分り易くされています。この詩を読み頭に浮かんだイメージを絵にするのです。詩は12題あり、この中から自分の好きな詩、描きやすい詩、難しそうだけど絵にしたい詩など自由に選ぶことができます。審査する立場から見ると、12題の中には絵にするには難しい、苦労するだろうと思うものもありますが、みんな各々に挑戦しているようです。

私事になりますが、このような子ども達の姿勢に以前より刺激を受けてまいりました。いつか茶山詩を自分のイメージで絵にしてみたいと思い、初めて「夏の思い出」を描き、菅茶山記念館での神辺美術協会新春展に出品しましたところ、思わぬ好評を頂き嬉しく思った次第です。これからも引き続き描いて行こうと思っています。

聞くところによると、昨今、学校では絵を描く時間は少なくなっていく傾向にあるそうです。そうした中、このような茶山ポエム絵画は先人を学びながら、尚且つ絵を描くという子どもの情操教育には大切なことだと思います。私も子ども達に力をもらいながら、一緒に頑張って描いて行きたいと思っています。

（本会会員）

茶翁　傘寿の元旦を詠む
百歳時代、健康長寿に学ぶ

上　泰二

平成31年4月、新元号「令和」が公表された。その三日後、筆者84歳は、図らずも知人から茶山直筆の漢詩「元旦二首 のうち一」（左欄）に「春川釣魚図」を模した背景に門松、鏡餅、左肩に鶴、右裾に亀を、扇一面に書かれた扇子を贈られた。ビッグプレゼントに、欣喜雀躍、この筆をとった。

元旦二首一　（遺稿七）

馬齒今朝八十盈　馬齒（齢）　今朝　八十に盈つ
回頭志業一無成　頭を回らせば志業一として成る無し
蝋梅香裡東窻日　蝋梅　香裡　東窻（窓）のH
又見春來帶笑迎　又春來を見て笑を帯びて迎う

（大意）馬齢八十を超えた。顧みれば、これといって成し遂げた業績は何一つない。蝋梅の香が東の窓辺あたりから匂って來る。また春を笑顔で迎えられることがうれしい。

（所感）高徳の鴻儒、菅茶山にして、やがてこの夏、天が定めた最期を迎える八秩の生涯を「志業一無成」と顧みている。片や、我が人生は？、失敗だらけ、悔い多きことの連鎖のように思える。就中、我が半生を過ごした教育界、歴史が多くの斧正を下し、慚愧・贖罪の念に堪えがたい。

昭和一桁生まれの先輩諸氏の戦中・戦後。生か死かの二者択一、矛盾撞着と激動の時代体験には及ぶべきもない、茶翁を見習って、

いつも心に太陽を！笑みを浮べ新春を出迎えるように務めよう。次の二の結聯も同工異曲、限りある身の明日への希望・祈願を自らに云い聞かせている。

二

臥痾恨欠拝新正　臥痾恨む。新正を拝するを欠くを
無奈衰躬負我情　奈ともする無し衰躬我に負くの情
続舎山禽何意思　舎を続りて山禽何の意思ぞ
和鳴連作報春聲　和鳴連りに春を報ずる聲を作す

（大意）病臥のため新年恒例の福山藩主阿部正寧公拝賀に出かけられない。この所、老衰で体が思うように動かない。家の周りでは何の意図があってか、多分、一向に外出の気配がない翁の安否を確かめようとしているのだろう。山鳥が頻りに鳴いて、春の訪れを報せてくれている。

これより十年前の新春、茶山70歳は次のような心情を詩に託している。

七十誕辰（後編巻七）

酔月迷花七十年　酔月　迷花　七十年
不能翻幸老林泉　不能翻って林泉に老るを幸いとす
人稱隠侶兼吟侶　人は称す隠侶兼て吟侶と
身愧頑僊又病僊　身は愧ず頑僊又病僊
壮志非無才素短　壮志無きに非ざれど才素と短く
童心仍有事多愆　童心仍ほ有りて事愆り多し
展觀壽頌堆牀上　壽頌を展観して牀上に堆し
且喜諸公未我捐　且は喜ぶ諸公未だ我を捐てざるを

（大意）花鳥風月を友として生きて七十年。無能故に、却って、それが幸いし、林泉（大自然）の中で馬齢を重ねた。世間では隠侶とか吟侶とか言って随分持ち上げてくれるが、自分としては、頑なな上に病気がちな変人であることを恥じている。これでも、壮年の頃は、大志を抱かなかったわけではないが、生来、浅学非才、今もって、童心が抜けず、愆りも多いこと。それでも、古稀を祝して諸公などからもらった賀詞が牀上に堆く積まれいる。それらを一つひとつ手にとってみていると、世間の人々がまだ自分を見捨てないでいてくれるのが嬉しい限りだ。高徳の人ならではの衆望・褒賛が茶山の残歯の活力源になっている。

七十自嘲（後編巻七）

疎拙従来世所嗤　疎拙　従来、世の嗤ふ所
今春七十轉添癡　今春七十　転た癡を添ふ
不知身上殘齡減　知らず身上残齢の減ずるを
猶且欣欣把壽巵　猶且つ欣々として壽巵を把る

（大意）粗忽な自分は従来世間の嗤い者、今春、七十にもなって益々馬鹿さ加減が増した。この調子でこの先何年生き残れるか分からない。それでもなお嬉々として祝いの杯を受けている。満更でもない。

（所感）茶山の賀詩は廉塾を取り巻く自然や茶山を敬慕してやまない人々との交流を詠込んだ新玉の年への汲めども尽きない希望で結ばれている。自助努力か、茶翁の行く手には、いつも前向きな不滅の燈が灯っている。

冬至　（遺稿　巻二）

衰老七十五　衰老　七十五
江山復一陽　江山　復た一陽
鬢絲隨日短　鬢絲　日に随うて短し
何歳解添長　何れの歳か　解く長きを添えん

（備後弁意訳）中山善照

年ゆーとりゃんした七十五　山や川にゃあ
また春來うに　髪ゃあ　短うなるばあじゃあ
いつか長ぎゃんが生やんホか

（所感）頭髪が長くなるどころが、禿げていくばかりの衰老を逆手にとって、明るく笑い飛ばしている。一度しかない人生、将に「苦しきことのみぞ多かりき」の感。二者択一なら、ポジティブな生き方を選ぶべきであろう。

気がつけば、傘寿。儒医ならではの幾首かの健康長寿術を詠んでいる。

八十諸友来壽　三（遺稿七）

微醺小飽戒常持　微醺　小飽　戒め常に持す
為有沈痾自少時　沈痾の少時より有るが為なり
残歯何縁盈八十　残歯　何に縁ってか八十に盈つ
看來二豎是良医　看来る二豎は是良医

（大意）微酔い、腹八分目を常に自戒、守ってきた。幼時から持病があったからだ。何故八十までも余命を保ってきたのであろうか。顧みれば一病息災、持病こそが良医。

（所感）人生百歳時代。「酒人某出扇索書」（後編巻四）にも、「吾輩紳に書すべし」。折に触れ、殊に大好きな甘露への自戒が詠まれてい

る。この戒めは「筆のすさび」巻之三「大食会」「大酒」でも、繰り返されている。

筆者がふと目を留めたのが、「題壽老人圖」(集外)中の次の詩句。二・三聯は二種類目(太字表記)がある。

節食使脾清1食は節すれば、脾をして清からしめ
寡欲自神寧2欲を寡うすれば自ら(精)神寧(易)し
少眠令體軽2少眠　體をして軽からしむ
寄言世間人3言を寄す世間の人に
屏欲自気定3欲を屏りぞくれば自ら気定まる
有方能延齢4方あって能く齢を延ぶ
寡慮乃神寧5寡慮　乃ち神寧し

肉体面で腸の健康。寡欲自神寧＝知足、中庸。精神面の安寧と相関関係にあると解釈すべきであろうか。儒医ならではの洞察であろう。加えて、茶山の全人格形成の根源とも言える詩酒徴逐、貴賤雅俗の別ない人物交流などに健康長寿の秘訣があるように思う。

賴山陽は「自分を育ててくれた」生涯の大恩人茶山について「茶山先生行状」に、「餐飯極めて少く、飯後は乃ち園圃を逍遙す。既にして帰りて書を読む。また未だ嘗て久しく坐せず」と記述、「終に以て寿を得るもの此を以てなり。」と「食後の散歩」「読書」「小まめに動き回る」など長寿の秘訣を補追している。

江戸時代文政期、「菅君詩を以て世に鳴る」など超弩級の評価を受け、ベストセラーとなった詩については、「吾が詩は縦ひ人が笑うとも、必ずしも補刪(加筆削除)を費さず。自ら吟じ又自ら賞すれば、楽意其の間に在り」(「讀舊詩巻」遺稿巻七)。「(人生を)楽しむ」「気楽に過ごす」ことに比重を置いている。それこそが、将に長寿の真骨頂のように思える。

(本会　副会長)

令和元年度定期総会開く
五年後茶山生誕記念事業目指して

5月18日、神辺商工文化センターで、令和元年度菅茶山顕彰会定期総会が開かれた。新たな役員・会員を加え、出席者33名。

開会のあいさつで、鵜野会長が「昨年度。茶山生誕270年記念事業については、会員を初め多くの皆様の参加・協力を得て「記憶に残る事業になった」と謝辞。次いで、議長に井上謙二氏を選出、議事①平成30年度事業報告・決算―監査報告②令和元年度事業計画・会計予算案③高齢などによる役員辞退に伴う役員の改選案(別表)が上程され、全会一致で承認された。

②事業計画の中、プロジェクト活動については、藤田副会長が・茶山学習会(年3回)・「顕彰会だより」(年3回)発刊・第1号配布など顕彰会活動充実・活性化のため新設された事業等の指標として・関係団体との連携・会員と顕彰会事業増強と事業参加を力説した。次いで、顕彰会年間行事予定表とHP「菅茶山新報」のトップページなどを紹介、用意された全議事が終了。休憩後、記念講演会へ。講師はお馴染み元県立歴史博物館副館長菅波哲郎氏。出自と長年の菅茶山研究の調査・研究・整理に基づいた「廉塾と槐」。当日配付資料のレジュメはHP「茶山新報」へ掲載。

最後、上副会長が講師への謝辞と早くも五年後の生誕祭成功へ向け、全会員の協力を呼びかけ閉会した。

定期総会

令和元年度菅茶山顕彰会役員名簿

(順不同・敬称略)＊常任理事　太字新役員

顧　問　高橋　孝一・**菅野　智紀**
会　長　＊鵜野　謙二
副会長　＊上　泰二＊藤田　卓三
理　事　＊黒瀬　道隆＊安原三津代
三宅真一郎・園尾　俊昭
藤井登美子・小林　貞子
羽原　知子＊**高橋　洋典**
松岡　明美・川﨑　行輝
事務局長　＊武田　恂治
会　計　＊嶋田　時市
監　事　**古田　義人・皿海　弘雄**

熱烈歓迎　新入会員
塚本　照美(東京都)**・山下　英一**・平川　文枝

菅波哲郎氏講演「廉塾と槐」(要旨)

1　楷と槐

①楷はウルシ科カイノキ。中国では學問の木として知られている。大正4年、その実が日

本に持ち帰られ、大正14年、湯島聖堂や閑谷学校などに植えられた。

②槐はマメ科クララ属。和名はエンジュ。陰暦六、七月、科挙登用試験頃開花。仁政を体現する木として宮廷や役所に植えられている。

2　菅茶山の槐への想い

①「北林遺集」(武元君立)～「槐山楼記」～

茶山の弟子、赤石子堂の書楼に「槐雨山楼」という扁額が掲げられている。茶山先生が命名されたものである。

②赤石家墓所「翻刻」要旨

槐は古来、宿徳(修行を重ね高徳を身につける)、家道の繁昌と子孫繁栄を願う樹。槐の成長に呼応して高徳が身につけばこれに勝る幸いはない。

3　廉塾の槐

①茶山詩　悼亡　文政9年　遺稿巻六所収

5月19日歿した妻宣(70歳)に捧げる哀悼詩。茶山79歳。茶山の居所「槐寮」から傍らの槐の香を乗せた風を肌に受けながら詠んだ心境であろう。

悼亡(三)　菅茶山

槐風竹露寂荒郊　槐風　竹露　荒郊に寂たり
柳徑莎階小石橋　柳徑　莎階　小石橋
獨酌無人為温酒　獨酌　人の為に酒を温むる無く
一池新月自良宵　一池の新月　自ら良宵なるに

(大意)　見るものすべてが悲愁の種。池に新月。またとない良宵なのに、もう酒を温めてくれる妻もいない。

②槐の政治的意味と教育者茶山

槐は「仁政」を体現する木とされている。廉塾の「廉」＝清廉礼節(清く正しく美しく)と共通する希いを託したのであろう。俗説「倹約」の文理解釈は間違っていると思う。政治批判詩「休否録」に掲載された詩や随筆「夏のこがげ」などから、自明である。

4　各地の槐

①神辺宿内の槐

即事(前編巻三)　菅茶山　天明7年作

溪村無雨二旬餘　溪村雨無きこと二旬餘
石瀬沙灘水涸初　石瀬　沙灘(早瀬)　水涸れ初む
満巷蝉聲槐影午　満巷の蝉聲槐影の午
山童沿戸賣香魚　山童　戸に沿い香魚(鮎)を賣る

②吉備真備公園(矢掛町)、半田山植物公園(岡山市)、両者とも枝垂れ槐。

附録　廉塾の草木

茶山が「太仲」名で宛てた知人への書簡によると、当時廉塾の庭にある草木が列記され、「此外之もの」があれば、「もらいたい」と依頼している。広島県立博物館に寄贈された国重文「茶山関係資料」を含む「黄葉夕陽文庫」には多方面から茶山に寄せられた文物があるが、草木のコレクターであったもあったことが窺える。随筆「筆のすさび」や儒医で南寮附近に薬草園の存在が判明していることなどからも想像に難くない。(文責　編集子)

菅茶山先生墓参の集い
「茶山讃歌」斉唱と茶山墓所案内

8月13日、茶山の墓前に鵜野会長以下、16名の会員と地元帰南子ども会代表が集合。本年は清掃作業はすでに7日に完了。楠の大樹などの生茂る墓所には厳しい陽光も入らず、台風10号の先触れか涼風が吹き抜けて行った。全員うち揃ったところで、順次、墓前に線香を供え、偉人の冥福を祈った。今春、他界された武村八丈こと武村圭作曲・兄武村充大(前本誌編集長)作詞「茶山讃歌」合唱後、郷土史に詳しい黒瀬理事による楽しい寸話。

「北条霞亭の養嗣子北条悔堂の妻山路氏は夫より早世したため、墓は福山市にある」など、例年、教わることの多い内容。蚊取り線香の消火を念入りに確認して散会した。毎年、近所の下宮さんに駐車場の便宜を図ってもらっている。紙面を借りて、謝辞を述べたい。

墓参の集い

茶山先生のお墓参り

神辺小学校　6年　中岡　美羽

8月13日、菅茶山先生の命日、私は初めて母と茶山先生のお墓参りに行きました。顕彰会の人のお話では、年々、こどもが少なくなったり、盆休みに旅行に出かける家族が多く、

子ども会の参加者が減ったそうです。

みんなで、線香をお供えして御参り、「茶山讃歌」斉唱の後、顕彰会の方からお話を聞きました。私が学校で習っていることもありました。

茶山先生は廉塾を開いて学問を教えていましたが、貧しい生徒にも塾の仕事を手伝わせて、勉強できるようにしていたことに特に感心しました。

墓所にはたくさんの子どもの墓があることを教えられ、びっくりしました。茶山先生の時代、天災のほか、疫病など今のようにちゃんとした治療方法もなく、幼くして大切な命を失ってしまったのですね。

お墓参りをしたことで、私たちが住んでいる神辺に茶山先生のような偉人がいたことを誇りに思い、茶山先生のようにどんな人にもやさしい人になりたいと思いました。

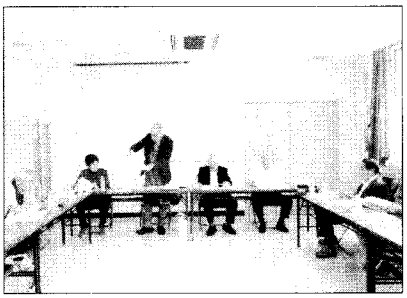
茶山学習会～茶山人物像＆茶山詩研究～
顕彰会主催独自事業として復活

発会に当って、本プロジェクト担当代表安原三津代理事が「福山でも知名度が今一の菅茶山についてこの学習会でしっかり勉強、神辺の偉人茶山の為人と事蹟を後世にしっかりと伝えていきたい」と挨拶。

第1回　6月15日茶翁の健康長寿に学ぶ

講　師　上　泰二　出席15名

傘寿を全うした茶翁の「健康長寿」を詠んだ詩を斉読、文理解釈。随筆「筆のすさび」(現代語訳)編集委員長井上謙二氏を招き、随筆の中から健康に関する二話を学んだ。



第2回学習会

第2回　8月24日　記念館展示作品解説

講　師　矢田笑美子　出席23名

折から記念館展示中の主な作品の解説。お馴染みの「菅茶山肖像画」(岡本花亭賛)については、茶山自身が詠んだ「自題画像」三首。茶山の自分の肖像に寄せる思いを詳しく学んだ。

第3回　10月26日

茶山ゆかりの地徳田・中条について学ぶ

講　師　黒瀬　道隆　出席17名

後述のゆかりの地訪問座学編。その折の配布冊子に沿って、明快、弁舌巧みなトークショウ。徳田、寶泉寺、門前の茶山詩碑、天明の義民碑＆裏手の義民徳永右衛門墓。「雛御殿」と呼ばれた客間では、四方に描かれた田中索我の人物像と襖絵などの復習編。

中条、黄龍山遍照寺、松風館十勝碑林、河相君推墓所など、最後を茶山が中条への往来で過ぎった「箱田道中」「丁屋路上」の詩で締め括った。

ゆかりの地訪問～徳田寶泉寺＆中条編～
心温るおもてなし＆熱血ガイド

9月28日(土)当会会員ら26名が真言宗寶泉寺(徳田)に集合。好天下、半日の野外研修を十二分に楽しんだ。講師黒瀬道隆理事の至り尽せりの気配りと咳を抑えての熱血ガイドに頭が下がる思い。亀居山寶泉寺では、ご亀山本弘住職と奥様が当日の寺務を繰り下げてまでの心温るおもてなし。寺総代の高橋洋典理事も初めてという古い襖絵や書の解説に、一同、「凄い」「ありがとう」を連発しながら、耳を傾けた。

遍昭寺山門にて全員写真

次いで、奇絶令人躍、ペタ踏み坂頂上並み、神辺平野が一望できる遍照寺へ。境内の茶山の詩碑、三基(うち和歌一首)、山頂の墓地では大空上人の墓碑に線香を供え頭を垂れた。

その昔、茶山ら著名人が通った中条の文人サロン松風館跡の象山献燈＆十勝碑林、その当主河相君推の墓へ御参りして、「欠画」を学び、この日の全日程を楽しく、悉なく完了した。

備中・茶山ゆかりの地を訪ねて
拙齋、良寛、西爽亭、真備の里

11月20日、年一回の研修旅行が行われ、25名の参加者がバスで晩秋の備中路を訪れた。黒瀬理事の入念な下見と徹底研究によって用意された詳細なガイドブック「拙齋・索我・良寛・槐の木を訪ねて」（20ページ）をテキスト（HPにも掲載）に車中の予習を経て現地、最初の訪問先かもがた町屋公園へ。西山拙齋顕彰会守屋会長、市教委平井文化振興課主幹、地元有志の案内で先ず鴨神社（題額表記は賀茂神社）、鴨方の過ぎたるもの三つ、「宮の石橋」を挟み東の「（法橋上人）田中索我」、「（西の孔子）西山拙齋」の墓参。拙齋の子孫は、先祖の血を引く医師で、四国在住。拙齋の居宅至楽居は金光町に移築。園内の伝承館は、藩主の私的な宿舎に充てられた旧高戸家住宅。床の間の「（至楽居邸内の池中）華月橋上の拙齋」（索我画）が拙齋&索我の交情ぶりを時空を超えてビジュアルに補完。

補陀落山円通寺は「良寛さん」の寺。3＋思いやりたい（黒瀬）班の4グループに別れてのガイド。茶山vs良寛の邂逅の有無は黒瀬先生の継続課題。故郷で聞き覚えのあるガイド翁の訛と名調子、それにほどよい冷気が体を包み、険しい山登りの苦労も眼下に臨む瀬戸海の彼方へ霧散。とは云え、この日、6358歩の全行程、数日後体の節々が痛むこと。

昼食後、茶山が名付け親と伝えられる西爽亭（柚木家住宅）へ。備中松山藩上級武士の館。藩主板倉公玉島巡見時、宿泊施設としての格式を具備している。「上の間」に続く「次の間」の今も天井に飛散した血しぶきを拭った痕跡の案内にドッキリ。戊辰戦争で玉島戦火の危機を救うため全責任を担って自刃した松山藩老熊田恰の最期を今に語り継いでいる。

備中研修旅行

次の見学地への車窓から、2018年7月豪雨水害の現地真備町を藤田副会長の被害状況に係る時事ニュース解説を聞きながら通過。

最後の訪問地は真備町まきび公園、中国書院の特徴的な建築様式、泮池、状元橋を渡って丘陵地の祖霊社を経て記念館見学。次いで吉備真備公園（矢掛町）、聖徳太子に早くから偉材であることを認められていた吉備公（茶山詩前編巻一）を巡ってのルーツは兎も角、今回は茶山詩や寮名に登場する槐に会うことが目的。フィナーレの吉備真備公園には北山の吉備真備像に至る石段の登り口、左右に槐の木が植栽されている。種類は「枝垂れ槐」、すでに満開の来夏に備え綺麗に手入れされていた。再会を期して、公園を後に、目に痛いほどの夕陽に向かって、夕陽の故郷神辺を目指した。

追悼
今西昭氏のご逝去を悼んで

今西昭氏（元副会長）が、令和元年9月26日、92年の生涯を閉じられた。謹んで哀悼の意を捧げるとともに、永年本会のために尽瘁されたご功績を偲びたい。

昭氏16歳は、昭和18年、府中中学4年次在学中、鹿児島海軍航空隊飛行予科に入隊、神風特攻隊志願。連日無休、明日をも知れぬ命を賭して猛訓練に励む中、出撃命令を待たず敗戦の日を迎え故郷の土を踏まれた。

教育現場に招かれ自らの非道な戦争体験と平和主義を訴える一方、神辺町社会教育委員、ライオンズクラブ会員として「神辺史跡めぐり」を創始、40年間近く故郷の歴史文化の語り部としても、地域貢献に務められた。

昭和63年、6名の同志と菅茶山遺芳顕彰会を設立、常務理事に就任。平成3年、本会最初の大事業歿菅茶山165年祭催行。平成4年、法改正で事務局が会長の指定する場所、今西氏宅へ移されたのを機に、常務理事兼事務局長に。この年、発刊された「まんが物語り・神辺の歴史」に登場した菅茶山の漢詩（現代語訳）が児童・生徒向け「茶山ポエム絵画展」創始のきっかけを創られた。

翌平成5年、本会主催「茶山ポエム絵画展」がスタート。平成14年、十周年記念「廉塾ポ

エム祭り」が開催された。地元七日市上町内会（鵜野謙二会長）も協賛、町民挙っての模擬店で盛り上げた。後の「廉塾を愛するボランティア絆の会」の魁事業でもあった。

改元を機に、平成7年、没後170年祭に代えて菅茶山生誕250年祭催行、平成11年、菅茶山記念館に菅茶山先生顕彰碑建立。平成14年、副会長に就任。秋、「神辺本陣」を舞台に10日間にわたり、「神辺本陣　動く夢シアター」開催。来訪者に「お成りの間」の解説を担当されるなど、オールマイティな活躍。

平成16年、「菅茶山先生の顕彰に父健三（歿100年祭・大正15年）と親子二代に亘ってかかわることができ幸せを噛みしめています」と17年間に亘る顕彰活動を顧みて退任の挨拶。翌年、「退任にあたり～思い出すこと」を会報第15号に寄稿。反省と提案に「茶山を研究しその本質に迫りたい」「町づくりはまず自分の居る所の文化と歴史を知ることから始まる」と。結びの宿場街道神辺のど真ん中に「茶山神社を！」の提案をどう読み解くべきか？

故目崎哲夫氏を偲んで

井上　謙二

目崎哲夫氏（元代表理事）が令和元年10月21日逝去された。享年92歳。故人は本会代表理事などを務め、平成26年5月退任された。

戦後間もない頃、若さに溢れた目崎氏は渋谷昇氏からの要請を受けて、福山通運創業に奔走、全国各地に拠点を建設し今日の礎を築いた。勇退後は故郷の神辺に帰り留守中皆様にお世話になった恩返しにと、神辺ライオンズクラブ・茶山顕彰会・ホタル同好会などに参加し神辺の文化発展に貢献されました。一方では地域の保育園理事長や檀徒代表として精力的に努められました。

お屋敷の西の山腰に山荘を建てて、囲炉裏を設け、多くの人々の交流の場を提供され自らも包丁を取っておもてなしをされました。趣味の水墨画は皆さんの驚嘆の的でした。多くの方々を愛し、そして愛された目崎氏を失い誠に惜別の感に耐えません。

拙劣な漢詩ですが、これを添えて追悼に代えさせていただきます。

追悼目崎翁　　井上水月

風雲落落似龍蟠　風雲落落として龍の蟠るに似たり
風塵辛勤豈苟安　風塵の辛勤　豈苟安せんや
豪毅九旬空逝水　豪毅の九旬　空しく逝水
仰天無奈別情酸　天を仰ぐも奈ともする無し別情酸たり

（大意）青雲の志は大きく、あたかも龍が天に昇るが如く。世の中の仕事は厳しく辛かったが、何で安楽な道を選ぼうか。豪毅に過ごした九十年も、空しく過ぎ去って再び帰って来ない天を仰いでも如何ともしがたく、お別れは寂しく悲しいものだ。

（前副会長）

第38回茶山ポエムハイク
～神辺川北・南編～
茶山ゆかりの神辺城趾・城下町を往く

4月27日、一見、絶好の行楽日和と予想したが、気まぐれな春一番が吹き荒れ底冷えのする寒い一日。茶山ポエムハイク春編（菅茶山記念館主催）が催行された。

参加者26名。案内役は和久井裕道さん。本会黒瀬理事も協助。神辺駅東口を出発帰着点に約6㌔のコースにチャレンジ。神辺公民館前茶山詩碑から、西ケ崎荒神社境内経由神辺城趾への登山道を上り詰め、神辺城趾へ。いきなり、山頂では眼下に広がる神辺平野を臨むパノラマを回復するため伐採・野積みされた材木の山と巨樹の切り株に参加者一同が目を見張った。家庭用の鋸と鉈による人海作戦であったろう。「神辺城趾を愛する会」（黒瀬道隆代表）6名の奉仕活動の跡である。伐採された材木は山道整備にも活用され、絶景眺望ポイント「鬼門櫓跡」には、案内板も設置されている。目下、鋭意執筆中「神辺城祉から茶山ゆかりの寺院」鳥瞰」も乞うご期待！

紅（黄）葉山城とも呼ばれた城趾の支峰から山頂の歴史民俗資料館見学。入口で茶山先生にご挨拶。原始から現代に至る「かんなべ」の歴史を学習後、下山。城下では七日市～三日市～十日市を経て、詩碑「農功」の舞台、猫児山が臨める松浦邸で締め括った。

茶山ポエムハイク見学地　神辺編

①詩碑「丁谷餞子成卒賦」　神辺公民館

茶山・山陽が別れを惜しんだ詩の舞台はこの谷間の上流にあり、現在も地元有志の奉仕作業で春先に満開の花を咲かせている。

②神辺城趾

建武二年（1335）備後守朝山景連築城以来、強者どもの夢が繰り広げられた跡。元

和五年（1619）福島正則改易によって、備後十萬石の藩主水野勝成が入城。その後、元和八年（1622）、現在地に新築した福山城に移転を機に廃城。

③福山市神辺歴史民俗資料館

道すがら、春はさくら、初夏は紫陽花が楽しめる。昭和五十四年（1979）、三つの展示室では神辺町内出土の考古資料（旧石器時代～現代）が展示されている。

④詩碑「西福寺賞梅」普門山西福寺7－52

境内北西隅に茶山の弟子、小早川文吾の墓碑（昭和二十九年、重政雄記并書）がある。茶山の研究家として著名な重政黄山先生が建碑されたものである。第4回学習会で再訪

⑤廉塾ならびに菅茶山旧宅　草浦孝画4－25

⑥詩碑「神邊驛」伝太閤屋敷跡14－156

⑦詩碑「夏日雑詩」十二の首のうち（三）

萬念寺　詩の舞台は「廉塾」？。17－203

⑧詩碑「農功」川南早王　松浦正明氏宅

13－142（末尾の数字は復刻版　号－ページ数）

松浦氏の茶山への熱い思い入れは「菅茶山への面影を訪ねて」（15－187）でも窺える。

ホタル演舞と曼珠沙華繚乱
堂々川砂留　西日本豪雨ニモ負ケズ

4月19日付、「中国新聞」が堂々川砂留のホタル復活を報じた。昨夏の豪雨で「堂々川ホタル同好会」会長土肥徳之氏が、一昔前「魅せられた黄色い光・ホタル」の幼虫の餌になるカワニナの流失を危惧、希望の光の祭典が懸念されていたが、どっこい先祖が残し、同好会員たちが大切に維持管理した防災の寶物砂留が、現役で地域と小さな昆虫の命を守り次世代へ繋いだ。

4月7日、最下流で幼虫7匹の上陸が確認され、その後、4月23日には、5番砂留（2006年、他の7基とともに国登録有形文化財指定）で30匹確認。現実には幼虫の上陸は確認した数より遙かに多いが、前年の20～30％程度と予想されている。6月9日、定期総会の頃、最盛期、事業報告で2018年度10大ニュースに添えて朗報が報告された。

11月17日、町観光課の案内で県内No.1、曼珠沙華繚乱の舞台に転換した砂留に多くの客人が、満を持して植栽された赤・白百余本の花に迎えられた。その後日譚、約半分が野獣はさておき、頭の黒い動物に蹂躙された。加えて、悪辣な不法投棄や盗掘を繰り返すホモサピエンスに苛まされ、赤字財政。遂に「彼岸花基金」の創設を決めた。無償でひたむき、ひたすら、ひとすじに色鮮やかな自然を演出する裏方に瀬戸内海環境保全活動功労賞が贈られたのが、せめてもの救いである。

第200回廉塾ふれ愛V絆の会奉仕作業
廉塾整美と世代間交流を希って

6月7日、廉塾ふれ愛ボランティア絆の会（鵜野謙二会長）所属の高齢者から保幼小学生26名が集合、年齢差を越え、お互いに近況を語り合いながら廉塾の草取り、清掃作業などに、半日、汗を流した。

当会は2015年、福山ブランド登録活動第一号として登録され、廉塾整備・美化活動と地域文化の継承活動を続けて来た。この日が第200回の節目。鵜野会長は「何よりも、将来に向け、世代を超えた交流が楽しみ」と。

菅茶山肖像自画賛　お披露目
茶山記念館収蔵作品展「夏」

菅茶山記念館収蔵作品展「夏」（5月28日～9月1日）に、当会が菅茶山生誕270年祭記念事業として発刊した復刻版の「菅茶山肖像画」自画賛（個人蔵）や、雅俗貴賤を問わない人間性の茶山が珍しく「盃の酒こそわが友！」と詠んだ紙本墨書軸装などが展示。

肖像画には「花にけふ　立ちいててけり　この春は　またとなりをも　とはぬ翁の」の賛がある。

ニコピン先生131歳生誕祭
「葛原校歌のひみつ」松岡義晃氏講演

6月23日、葛原邸でニコピン先生こと葛原しげるの生誕祭が行われ、松岡義晃氏講演。この日をはさんで、17日～25日の期間中、「想い出の品展示」も行われた。また、菅茶山記念館では、企画展「葛原しげる展～書画が伝えるもの～」（6月20日～9月1日）も。

松岡氏講演要旨（文責　編集子）

葛原しげるは、明治31年、福山中学（現誠之館）に入学、明治36年、同校卒業。大正元年、当時の第八代青木義太郎校長から「福山中学校校歌」を依頼された。しげるは自らが作詩した「誠之舎（福山藩阿部家育英事業）舎歌」

を送って「どうか」と尋ねたら、「この様なので結構」と即答があった。しかし、日限を切られていなかったので、先延ばしにしていた。その中に、青木校長は転勤、しげるは到々、嘱を果たさなかった。

第十代田村喜作校長時代、一教諭の友人から催促され、苦心して校歌を作詞、某大家に作曲も依頼、電送した。ところが、それが幻の校歌になってしまった。

大正元年1月25日、第五十九回福山中学校創立記念式典で校歌が発表された。しかし、それは肝腎のしげるの苦心作ではなく、田村校長命で部下の樋口千代教諭作詞、楠木正一作曲（『嗚呼玉杯に花受けて』による）の校歌であった。

明治45年、福山中学入学、大正5年、同校卒業の井伏鱒二「半生記」によれば、彼が二年か三年（大正2年か3年）の頃、最初の校歌　作詞　樋口慶千代）が、前後は忘れたが「・・・良徳公（阿部正弘）の創設に　烈公（水戸藩主徳川斉昭）名づけし誠之館　語りて榮の歴史あり・・・」の存在を記している。鱒二の記憶にある「神仙遊ぶ」で始まる歌詞である。

しげるは何も事情を知らない在校生からのこの連絡に不愉快千萬であった。程なく、青木校長が何うして知られたか、「○○教諭が間に入って困っているだろうから・・・」と御手紙が寄せられた。

昭和6年、第十四代福間典海校長からの正式な依頼を承け、福山誠之館中学校第一校歌（儀式用）葛原しげる作詞・小松耕輔作曲、第二校歌（野外用）葛原しげる作詞・藤井清水作曲が決定。昭和7年7月4日発表された。

次いで、昭和26年10月15日、福山東高等学校新校歌第一校歌（葛原しげる作詞・小松耕輔作曲）、第二校歌（葛原しげる作詞・故藤井清水→平井康三郎作曲）発表。昭和28年、校名が広島県立福山誠之館高等学校と改称された。

日傘踊りの女たちin廉塾
神辺写真同好会が展示会

7月10日、廉塾を舞台に撮影された同好会（重政隆人主宰）のミニ写真展へ出かけた。会場はモデルの小林澄喜与さん（県郷土民謡・踊協会事務局長　神辺町川北）宅。小林さんは、高橋孝一会長時代から菅茶山顕彰会と昵懇。1996年、町広報「かんなべ」（第516号）のカバーガールに掲載された舞踊の名手。菅茶山生誕255年祭（2003年）での「傘踊り」みすみ会の一員。西山拙齋祭や柴野栗山祭でも芸を披露したことがある。

廉塾中門前、溝水路と紫陽花、動・講堂上り框附近をバックにした日傘の踊り子たちの構図が印象的で、お馴染みの茶山詩を重ねた。

採蓮曲　二首　（一）前編巻五

誰家采蓮女　誰家　采蓮の女
羞人不出花　人を羞じて花を出でず
風起花繚乱　風、起って、花繚乱
時時露鬢鴉　時々、鬢鴉を露らわす

第27回特別展「菅茶山をめぐる画人たち」
「四皓図」（月僊画・菅茶山賛）初公開

この特別展（9月4日～10月14日）で、「四皓図」が注目された。小財陽平（「菅茶山とその時代」新典社　平成27年）によれば、この題画詩に、漢の皇位継承者決定のため、已む無く商山から下山した4人の隠者（皆道を修め、己を潔くし、義にあらざれば動かない人）に、故郷かんなべに持続的な教育の必要性を痛感する余り、処士西山拙齋とは異なった私塾の郷校化と藩儒の道を選んだ茶山の心情を重ね合わせ、「呼起の賛」と称される題画詩の筆を握ったように思われると。

四皓図賛　菅茶山

漢初無用之物　漢初無用の物
無如商山四老人　商山の四老人に如くは無し
而蕭曹平勃之所不能　而ども蕭曹平勃の能わざる所
四老人則能之　四老人則ち之を能くす
夫鼓敗而成薬　夫れ鼓敗れて薬と成り
木朽而出芝　木朽ちて芝出だす
今之無用於世者　今の世に無用なる者
吾安知其不有用之時乎　吾安くんぞ其の有用の時有らざるを知らん乎

（大意）漢の初め、商山に隠れた四老人ほど役に立たない者はなかった。しかし、蕭何や曹参、あるいは陳平や周勃といった（漢の高祖の）功臣でさえ成し得なかったことを、四老人は成し遂げたのである。破れた太鼓の皮が薬となることもあれば、腐った木から霊芝

が生じることもある。現在、無用とされているものでも、今後、役に立つ時が来ないなどと、どうしてわかろうか。

註　四老人（秦の始皇帝時代の隠者　東園公、用里先生、綺里季、夏黄公　囲碁に興ずる二人、両脇で観戦中の二人）

水野勝成神辺城入城400年祭年 錦秋神辺宿イベントたわわ

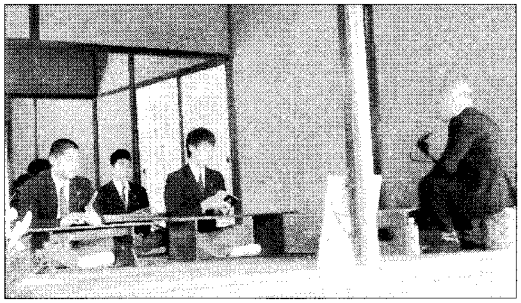
10月18日～22日、秋季茶山ポエム絵画町並み格子戸展。70点を30戸の町屋の格子戸に展示。西から本陣前特設ステージでのコンサート・マジックショウ、太閤屋敷前広場の地元名産品店、町屋見学、街道筋を練り歩く町おどりなどアトラクションに色を添えた。

10月20日、廉塾では秋の収穫祭、名物『元祖・うずみ御膳、廉塾大学いも、ふれ愛おでん、ふれ愛コーヒーセットの販売。

11月9日、町観光協会主催「史跡めぐり」、バスで、昼食弁当付、茶山ゆかりの地、葛原邸、古代ロマン御領三絶などを訪れた。

11月16日～17日、神辺学区町づくり推進委・神辺宿文化研主催「歴史文化を活かした町づくり」（三カ年限定最終年事業）、本陣では御成之間、二之間を「阿部伊豫守様巡見御小休止間取仕様帳」に基づいた大名利用時の利用時の座敷拵えの復元展示など。

廉塾講堂では、塾主菅茶山代講、鵜野謙二会長が「論語を読む集い」を開講、参加体験型のわくわくイベント。「閑谷学校あいうえお論語」（閑谷学校顕彰保存会）テキスト50章所載の中、5章（HP「菅茶山新報」掲載）を選んで、解説後、「門前の小僧習わぬ経を詠む」、「読書百回、意自ら通ず」朗誦を繰り返し、故里の宝、漢詩人茶山を識る入門イベント。



論語を詠む会

神辺公民館では中間総括「宿場町フォーラム」で、地元次世代を担う神辺小・神辺西中学校生、井原線、山陽道沿いの宿場町、高屋・矢掛町代表などの実践に基づく現状・課題報告。動もすれば、豊かな生活を奪う少子高齢化、普遍的な上方志向、廉塾、本陣を筆頭に重伝建など豊富な歴史文化を活かした賑わいづくりを目指そうとすれば、住民意識の向上、地場産業と住みよい生活基盤の確立、交通網の整備、危機管理対策、おもてなし施設の充実等々諸課題が山積している。

そうした課題解決の方途として、矢掛の取り組みに学ぶこと大なるものがある。矢掛町は、人口14247人、4500世帯の町。平成5～19年度、景観整備事業で町並み再生と併せ、三世代を繋ぐ郷土愛を育てる生活環境づくりと集客事業を徐々に充実、遂に、平成27年度を「観光元年」と位置付けに漕ぎ着けている。

飜って、神辺宿、町づくり企画イベント会場のそこかしこで小中高生や町内会有志の姿が見受けられたことが何よりも心強い。

平田玉蘊記念室オープン 菩提寺・持光寺が常設展示

11月23日、持光寺（尾道市土堂町）に閨秀画家平田玉蘊（1787～1855）常設展示室がオープンした。玉蘊は頼山陽との恋に破れたが、茶山や頼家族など文人や地元豪商に手厚く支援され、白井華陽「画帖要略」（1802年）、24人の女性の一人として掲載されるほど画家に成長した。今回は「西王母図」（菅茶山賛・原詩『題　西王母寿大熊文叔令堂』文政8年　遺稿巻五所収）ほか、9点の軸装展示。年4回展示が入替えられる。

註　西王母　中国神話上の女神。三千年に一度だけ稔り長寿をもたらす桃を武帝に献上したと伝えられている。

神辺の文化と歴史～菅茶山と本陣etc～ 福大が神辺特区2019文化フォーラム

福山大学が2019年度文化フォーラムとして「文学・歴史を通してみる神辺の文化と歴史」を主題に、井伏鱒二、菅茶山、神辺本陣についての新しい研究成果を4回の講演会で発表、瀬戸内圏の海山里山文化概説。

第2回　10月19日　ふくやま文学館

菅茶山と内海文化圏　広島大学竹村信治教授

本論に先だって、竹村教授が広島大学在勤中（平成4年～令和元年）が、内海圏から寄託若しくは蒐集した膨大な資料、「三原市立図書館旧蔵書」「備前邑久岩佐家旧蔵書」「讃岐善通寺（誕生院）聖教」など序論として詳述。それらに基づいて、備後・県歴史博物館所蔵資料などと対比、検証しながら本論「梅花六十首」が展開された。「梅花六十首」は「梅花二十首」「梅花稿三十首」「梅花稿十首」の合綴と思われる。六十一首本も存在する。

詩作について、和泉式部は「歌を詠む」ではなく「歌を産む」と表現した。正鵠を射ているように思う。茶山について、頼杏坪は「詩は尤もその長ずる所にして、努めて実際を叙し苟も作らず。鍛錬極めて至る」と墓碑銘に整理している。一方、茶山自身は晩年「吾が詩は縦ひ人が笑うとも、必ずしも補刪（加筆削除）を費さず。自ら吟じ又自ら賞すれば、楽意其の間に在り」（「讀舊詩巻」遺稿巻七）としている。

しかし、完成度を高めるため何度も校正改作が行われた傍注や書き込みが詩集に残されている。一回つくったものが、元も子もなくなる例もある。例えば、「梅十二首」（後編巻二）、承・転・結句と詠んだ上、起句を詠むのが効率的な漢詩作法と言われるが、その是非は兎も角、起句の主人公が老叟・老嫗・少婦などを経て、最終的に遊女で収束している。また、旧詩に二十八字付加、絶句から大胆に律詩に転換した作品もある。

いずれにしても、師那波魯堂に送った「人之詩ハ我を忘れやかましく間違いなりにいひ好き、自分之詩ハとかく人ニいはれ好きに御座候」の書簡に見られるように、最初に京都詩壇に、「現実性と写実性に着目し生活に密着した宋詩」を鼓吹した六如上人や頼山陽、武元君立、北条霞亭など様々な有識者にリップサービスではなく忌憚のない斧正を求める姿勢を貫き、然も直言を素直に受容している。かくて、「黄葉夕陽村舎詩集」が当時のベストセラーになっただけでなく、今日もなお古典文学の羅針盤として、内海圏のみならず、海内の燈台として光芒を放ち続けている。

（文責　編集子）

第3回　11月2日　福山文学館

神辺本陣の建築とその歴史

福山大学　柳川真由美講師

2017年度から2018年度にかけて、神辺本陣の建築とそれに関連する資史料の調査を行なった。近世の普請については、「菅波信道一代記」（以下「一代記」）、天保三年作成の「神辺西本陣図」（以下「本陣図」）に詳しく、他にも墨書銘や古写真など参考となる資史料が多く残る。

＊「菅波信道一代記」　本陣役を務めた尾道屋菅波家の第十一代当主菅波序平（信道）による自叙伝。序平は、備中連島出身、儒医を目指し、廉塾に入門したが、師茶山の勧めで尾道屋菅波氏（神辺本陣）に入婿した。「一代記」は、子孫への道標として、序平が自らの生涯を口述筆記させたものである。また、日常生活・世相・風俗などにも詳しく、326点の挿絵には神辺本陣を中心とした近世庶民生活が活写されている。

・家督相続から約十年、最初の普請として、文政十二年に長屋（木なや）を崩し、二間に九間半規模の土蔵（家人が「古蔵」と呼称）を主屋の北側に新築した。次いで、天保二年には、第三代目源左衛門によって承応年間に建てられた主屋が老朽化したことから、序平はこれを建て替え「新宅」と称した。「一代記」の記述では「俄に」思いついたとされる主屋の建て替えであるが、新出の史料から、文政十年には筑前黒田家に普請を願い出ており、工事の完了は天保三年であったと考えられる。その後も、本陣座敷の修築、酒蔵増築、酒造店の新築など、序平は大小様々な普請を行なっている。

・主屋の維持費として、黒田家から「御手伝銀」を下賜されているが、それを基金に約二十年運用増益を行い、費用の一部に充てていたことが分かる。

・普請に用いる資材は、木・石材の多くが備後圏で調達されている。御成門左右の外塀の基礎石をはじめ、石材はほとんどが寒水寺（中条）から運ばれている。釘は鞆、瓦は神辺宿など、近隣から調達された。府中からの木材運搬には筏を組んで、芦田川―高屋川を利用、掛の橋で陸揚げしており、芦田川を使った河川運送の例として興味深い。

・普請に携わった職人も、地元や近隣在住者が占めている。例えば、主屋普請では、大工

の勘三郎（宇山）、庄兵衛（戸手）、左宮は清兵衛（当駅）、石工は文平（千田）、瓦工、新七（後町）などである。複数の普請に携わった職人も多く、親子二代にわたって従事した例も見られる。

・本陣内には夥しい「祈祷札」が保管されていた。祈祷札は、家内安全などの祈願をした際に作られた木札で、神辺本陣では寒水寺と近くの西福寺で毎年のように祈祷を行なっていた事が分かる。重ねられ釘付けされていて確認しづらいものも多いが、十八世紀半ばから明治十年代までの296点の祈祷札が現存している。

・序平が当主であった期間には、毎年のように敷地内で普請が行なわれており、神辺本陣は大きく姿を変えていった。近代以降に取り壊された建物もあるが、本陣座敷はもちろん、主屋や内蔵をはじめ、多くの建物が「一代記」に見られる往事の姿をとどめている。

（深謝　本稿は柳川真由美先生ご寄稿）

続　国重文「菅茶山関係資料」ご案内
於　県博近世文化展示室

・2018年10月12日、改装オープン以来、二カ月毎に展示入れ替えが続けられ、茶翁崇敬者の目を楽しませている。紙数の都合で、今回は次の見学メモを掲載した。その他は初回から毎回、HP「菅茶山新報」へ掲載。

第6回展示　8月8日～10月6日

～菅茶山の家族たち～

第1章　菅茶山の生涯

・前回70歳の肖像に次いで、「菅茶山肖像」（伝谷文晁画『近世名家肖像』に収められた壮年期の肖像）紹介。

・茶山にとっての學問とは？「一番大切なのは実際の行為である。行為を先にして儒学の教えを帰着点とする」と。

・茶山と交流のあった人々23人の顔写真がずらり。老中松平定信や大学頭林述齊など多士済々。筆者、未知の名が多いことに反省しきり。

・「菅茶山喪儀」（冊子）茶山の葬儀記録。儒教式の葬儀が行われ、葬送の列には200人以上の人が集まった。

第2章　廉塾の建造物と教材

・廉塾沿革史―開塾天明元年頃説など修正

安永4年（1775）自宅に金粟園を開く（佐々木良斎書「金粟園」（巻子）展示）

寛政2年（1790）頃　黄葉夕陽村舎を新築。寛政3年、ここに塾の拠点を移す。

寛政8年（1796）塾の永続目的で、塾建屋と付随する田畑を藩に献上、福山藩の郷校となった。以後、塾は「閭塾」「廉塾」と呼ばれた。

文化2年（1805）槐寮建築。文化3年、南寮、文化5年、敬寮（新宅）建築。

・「論語集註」（冊子）論語の解説書

素読用に、返り点や置き字、送り仮名がつけられている。

第3章　菅茶山の家族

～実家「新宅」と後継者～

・菅家の後継者

父　初代　樗平（扶好）分家　新宅（上本庄屋）

2代　太中→3代　圭二→4代　萬作

・廉塾の後継者

文化6年（1804）頼山陽（1年余で出奔）

文政3年（1820）門田朴齋（離縁）

文政9年（1820）北条霞亭（病没）

文政10年（1821）菅三

・「享保庚子以降日月そく記」（冊子）甥萬年が写した天体観測記録に茶山が書き込みをしている。

「菅三覚書」（仮綴）「堯佐、不行跡で離縁。茶山は塾の後継者を望んでいなかったが、親類、縁者の説得で菅三を養子に。（茶山没日に藩への願書）堯佐が適切であれば、菅三は後継者にならなかった。」と。

・「敬」命名書（折紙）敬とは「物事を大切に思い心をこめて目的以外に目を向けずに一生懸命生きる」こと、その願いを籠めている。

特集　描かれた動物たち～茶山の許に残された記録から　9点～

うち、「日東漁譜」「アシカ図」「雷獣図」は「菅茶山の世界」にも掲載されている。

第8回展示　12月12日～2月2日

～菅茶山と福山藩～

第1章　菅茶山を語る

・菅茶山自画賛の肖像画、「黄葉夕陽村舎詩」・「筆のすさび」などの著作のほか、茶山を語る師那波魯堂並びに「菅君詩を以て世に鳴る」と絶賛した亀田鵬齋などの詩（集）紹介

第2章　菅茶山の教育拠点

・茶山最初の塾舎名「金粟園」の書（医学の師和田東郭書）、郷校廉塾誕生に至る経緯、「神辺宿図」＆「廉塾図」のロケーション紹介

第3章　・廉塾主菅茶山と福山藩のつながり

・黄葉夕陽村舎から廉塾への沿革

寛政2年　自宅の東北に塾の建物建築

＊幕府→林信敬「寛政異学の禁通達」送達（各藩や私塾の他学派を禁ずるものではなかったが、各藩校でも朱子学を正式な学問にするきっかけになった。）

寛政3年　そこへ塾の拠点を移す

寛政8年　塾の建物に田畑を添え、福山藩に献上申請、寛政9年、郷校として認可

＊文化元年　藩主阿部正精が茶山の嘱みに応じ書「不如學也」を贈る

この他、教育内容に関わる資料として、掛軸「朱文公之語」（阿部正精書）「白鹿洞書院掲示」（福山藩家老佐原作右衛門義方書）など

第4章　福山藩儒菅茶山としての立場と仕事

・菅茶山の履歴書

享和元年　福山藩校弘道館に出講を命じられる。寛政4年「五人扶持」賜俸後の「菅茶山履歴書付」～文政3年・その後文政9年補足）の昇進、褒賞に付随する書状

・公務　江戸出府（二回）、勇鷹神社造営

藩史誌編集　「福山志料」「風俗御問状答書」

特集1　平成30年度保存修理資料（3点）

・「頼山陽・頼杏坪詩巻」。「梅水仙図」（野呂介石画）、「歳寒三友（文人の理想像）は松竹梅が基本だが、時に梅・水仙・竹の場合もある」と。

特集2　茶山、年末年始を詠じる

・「黄葉夕陽村舎詩集」草稿から、70歳の元旦・大晦日を詠んだ詩を披露。

2019年度茶山ポエム絵画展
沢田望衣さんポスター採用作品

1月11日、菅茶山記念館で2019年度（第27回）茶山ポエム絵画展表彰式。公財ふくやま芸術文化財団理事三好雅章氏が沢田望衣さんら最優秀受賞者などに表彰状とメダルを贈った。当館絵画展（2月2日まで）後は、春秋町並み格子戸展、市役所ロビー展、深安地区医院・歯科医院展などでお披露目される。

＊部門別最優秀賞受賞者の皆さん（敬称略）

沢田望衣（誠信幼稚園）日野莉愛（湯田小一年）石川美伽（神辺小二年）石本朱音（道上小三年）益田悠桔（中条小四年）藤阪将太（竹尋小五年）若竹哲也（竹尋小六年）栖崎裕希子（誠之中二年）

ポスター採用作品

編集後記

◇今年の新語・流行語大賞、ラグビーのONE TEAMが日本全土を熱狂の渦に巻き込んだ。グローバル時代、多様性受容のヌーベルバーグ到来の前兆とか。

◇ここ神辺宿では、地元学区民主導の「歴史文化を活かした町づくり」事業計画総括年、地元小中高生が関連行事参加。福山大学も神辺特区文化フォーラムなどで背中を押してくれた。

◇高齢化・会員減が懸念された本会も、本年は多くの新入会員が入会、支援の玉稿も寄せられ、次の生誕275年祭への夢が膨らむ。

◇ONE or ALL KANNNABE、いずれにしても、団結こそ底力、当面、今回の総括で残された課題解決へ向け、公私関係団体が連帯、更なる持続可能な地域創生を期す活動に挑むべきであろう。

◎顕彰会事務局
武田恂治（福山市神辺町西中条二一一五）
TEL・fax（084―967―1172）
◎会報編集部
園尾俊昭（福山市神辺町十九軒屋二八九―四）
TEL・fax（084―960―5595）
上　泰二（福山市神辺町湯野二三―八）
TEL・fax（084―962―5175）
◎HP「菅茶山新報」info@chazan.click
藤田卓三（福山市神辺町平野一一九―一）
TEL・fax（084―962―0528）
◎印刷所　㈲精美堂印刷所
（福山市神辺町川南一〇四三―五）
TEL（084―962―0355）